

## 美容技術を用いた「結ぶ」の表現（1）

## The expression “MUSUBU(Tie)” with beauty techniques (1)

富田 知子<sup>1)</sup> 青木 和子<sup>1)</sup>

## 抄録

美容技術を用いた作品の展覧会を、2012年3月5日より3月10日までギンザギャラリーハウスで開催した。本稿ではこの展覧会（2人展）について報告をする。2人展は山野流着装皆伝であり本学服飾系科目を担当する青木と美容デザインを担当する富田が協働した成果である。青木は帯結びをテーマとした『オビジェ』を、富田は日本髪をテーマとした『人形』を制作した。これら作品群は、すべて10センチ前後の大きさと制作されている。

キーワード：結ぶ 和 帯 日本髪 美容

## I. はじめに

山野愛子は『美容芸術論』のなかで、土中から発掘された古墳時代の埴輪を元に当時のヘアスタイルを復元したことで「四千年前も、現代も、美の意識ということに関しては、ほとんど変わりが無いのか」<sup>1)</sup>と述べている。美容技術は社会を作る人間の生活の基盤や精神性をも含むかたちで、時代に求められるかたちに変化し存在し続けている。

2人展では、日本独自の文化として時代の流れに沿いながら変化し、現在も日本の象徴とも言える「和装」の技術作品を展開した。作品群は、すべて手のひらに乗る程度の大きさと、制作されている。これは、もののサイズを小さく非日常化することで、形を俯瞰し、これまで日本髪や帯結びに対しての「こう有るべき形」という予見を見直し、新しい視点が生まれるのではないかと考えたためである。

## II. 「結」をテーマとする展覧会

本2人展では、「結」が共通のテーマとなっている。帯を結ぶ、髪を結う、という事である。日本においては「結」は縁起の良いものとして扱われる。縁を結ぶ、実を結ぶなどの言葉、祝う場に欠かせない水引等多くの場面で使われる言葉である。この言葉を契機に、日常の中に特別なもの、そして日本の大切な文化と認識される和装の技術を用い表現することとした。個々の作品については、別稿“美容技術を用いた「結ぶ」の表現（2）、（3）”にて報告する。

## III. 帯と髪

なぜ帯と髪なのか。本展覧会を開いた2名の作家は、青木は「帯」、富田は「髪」を専門としている。人体を基盤とし、美しい「かたち」をつくる上での帯型と髪型は、バランスの関係性が深いものである。双方共に体から大きく広がりを持つ「かたち」をつくる事ができ、また「かたち」に意味を持たせる上で、それぞれが呼応し表現を強めるのである。

また、美容行為を行う手順として通常、顔の近くから始める事が多いことを考えると、帯を閉めることは美容行為を完成し締めくくることがである。この展覧会では、髪と帯との双方で、美容行為のひとつつながりの流れも表現したいと考えた。

## IV. 展示

展覧会は、銀座2丁目に有るギンザギャラリーハウスでおこなった。銀座の選択理由は、東京という地域の中で、流行の発信基地となる街は表参道や原宿等他にも存在するが、歌舞伎座、多くの画廊、呉服商、ハイファッションブランドなど日本の文化の古と新の融合を見る事の出来る場所であり、平成19年度の経済産業省の統計による商業統計<sup>2)</sup>においても銀座2位、近隣として日本橋地区も含めると商業力の強さをもつ地域であることから、今回の作品の内容に不可欠な場所と考えた。

1) Tomoko TOMITA Kazuko AOKI

山野美容芸術短期大学

連絡先:〒192-0396 東京都八王子市鎌水 530

【会場の展示の様子（写真4点）】



写真1

入り口からみたギャラリーの景観。赤い毛氈のうえに「十二段返し」が展示されている（青木作）。「十二段返し」は1点ごとに漆の盃に納め、その下に黒い細帯を敷くことで流れを生み出し、入り口から見た展示奥に高さを出す。ことで視線の流れを作り展示をした。毛氈の赤は「和の雅」を表し、展示空間にインパクトを与えている。



写真3

ふたりの作家の作品が呼応し合う。青木の作品は潔さを感じさせる青竹を使用し、帯の凛とした美しさを引き立てている。奥の壁左手には青木の額に納めた「オビジェ」作品3点と右壁には富田の作品一点。（作品詳細については別稿“美容技術を用いた「結ぶ」の表現（2）、（3）”にて説明）



写真2

大きさの違う木性の枠を使用し高さに変化を付けた。高い台を中の開いた枠にすることで奥の色も見え空間に流れが生まれる。



写真4

帯と髷の形が類似している例。髪型の特徴である横の「鬢」と後ろの「髷」は下方向末広りの形となり、帯形の左右のたれ先が下方向に作られている。

## V. 展覧会の成果

青木、富田共に作品について、当日に至るまで、コンセプトの大枠を定めたことを除いて、個々の表現を重視するため作品について具体的な打ち合わせを行わなかった。しかし同じ空間に作品をおいた事で、個々の作品の完成度が増したと感じた。本学の理念でもある美道五大原則にある髪、顔、装い、精神美、健康美、がここに成立していると感じたためであると考ええる。髪、顔、は富田の作品であり、装いに関しては富田の一部と青木の作品であることは明白である。精神美、健康美はどこに宿るかを考えると人体の内部に宿り、凛とした姿勢、微笑む顔、豊かな艶張りのある髪からそれを感じ取ることができる。これこそ無意識の中に有る人体感覚と美容技術の関係である。今回の展覧会は、美容関係者だけでなく、美容を業としていない一般の方にもご来場いただいた。このことも一つの成果であろうと考える。

## VI. おわりに

美容技術は日常のなかで、永久的な形をと止めない髪型、帯形をオブジェとして半永久的な時間の中で形を止めみせることができた。人形作家ではない私達が目指したものは、美容技術と言われるものの形を具現化することなのかも知れない。これをさらに明確にすることを目標にして、今後も日常を見つめ、新しい方向性を模索し、美容芸術としての作品を制作したいと考えている。

## 謝辞

この展覧会を行うにあたり、ご理解とご支援頂きました山野美容芸術短期大学学長山野愛子ジェーン先生、ご意見お手伝い頂きました佐藤美奈子様、及川しづえ様、西川奈実様に感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 山野愛子：美容芸術論，（株）IN通信社，p.289，1991